

休校明け1カ月 教室を訪ねると

コロナ禍の教育現場の現状を知りたかったので、朝日新聞 12 日の標題の氏岡真弓・編集委員の記事に注目した。抜粋して紹介したい。リードから「コロナ禍による長期休校が明けて1カ月余。各地の学校では分散登校から通常授業に戻ったが、コロナ前の日常とはほど遠い。感染予防に気を使い、子どもも先生も緊張を強いられている。教室はいま、どうなっているのか。神奈川県平塚市内の小学校を訪ねた。

平塚市立藤原小学校4年2組の教室の戸を開けると、37人の児童がひしめいていた。机の間を測ると、42センチしかない。文科省の衛生管理マニュアル通りに1.5メートルを目安にあけると、机が教室からはみだしてしまう。

分散登校中の6月17日に訪ねたときは、約半数の17人が市松模様の配置で座っていた。先生たちは少人数学級のよさを身をもって感じただけに、40人学級の多さを改めて実感したようだ。

コロナ前と後では授業の方法も変わった。飛沫が気になり、話し合いやグループ学習はできない。大きな声での発表も無理だ。「話し合い学び合う小学校の授業が難しい。教師が話し、黒板に書くスタイルになってしまいます」。先生はマスクの下の汗をぬぐいながら話した。

給食の時間も様変わりした。この日は人気の豚肉の煮物とポテトだったが、子どもたちはマスクを外し、無言で黙々と食べる。しゃべりだす子がいると、隣の子が指を口に当てて、「静かに」のサインをした。

食べ終わると、20分の昼休みだ。唯一外で遊べる時間だが、ここでも密にならないよう学年で遊ぶエリアが決まっている。互いの体を触ってはいけないと言われ、なかなか窮屈だ。だが、子どもは負けていない。考え出したのが「エア鬼ごっこ」だ。鬼が手を広げ、タッチする寸前まで相手を追い込んだら、鬼の勝ちだ。「みんなといるとめっちゃテンションが上がる。超いい」と4年の女子は笑う。

ただ全員が学校生活になじんでいるわけではない。休校の時、長時間ゲームをしていたせいで、授業に集中できない子がいる。分散登校のように、1日おきにしか登校できない子もいるという。「3カ月の休校中のリズムを『明日変えて』というのは無理。少しずつ手をかけていく」と児童指導部を担当する先生。

学校を後にする時、玄関の近くにあるメダカの水槽が目に入った。コロナ下で子どもの緊張をほぐしたいと、先生たちが設置したものだ。クラスを飛びだした子が、ここに来てメダカを見て、気持ちを落ち着かせているという。



(2020年7月14日)